

新出の伝西行筆「白河切」の特徴と書写形態

高 城 弘 一

共通教育非常勤講師

はじめに

伝西行筆「白河切」は、主要手鑑には必ずといっていいほど収録されており、よく知られた古筆の一つである。掛物になって伝存しているものも、少なくないようである。

本稿では、従来知られなかった新出の「白河切」2葉を紹介し、その特徴とともに、特異な書写形態について考察するものである。

1. 伝西行筆「白河切」の概要

『新撰古筆名葉集』（安政5年、1859年刊）によれば、西行法師の項目には10種類の古筆が挙げられている。まず「落葉切」、次に「月輪切」、その次に、「白川切 六半後撰哥二行書江戸切ト云杉原昏」として、紹介されている。

「白川(河)切」という名称の由来について、小松茂美氏著『古筆学大成』第6巻（後撰和歌集1、1989年1月、講談社）では、以下のように詳述する。

「白河切」の命名の由来は不明ながら、松平定信（一七五八—一八二九）の遺愛にちなむものか。田安宗武の三男、將軍徳川吉宗の孫であった賢丸が、安永三年（一七七四）、十七歳の時、幕府の命により、奥州白河藩主松平定邦の養嗣子となり、松平姓を名乗り、ついで名を定信と改めた。定信は文武両道の奥義に達し、書画をよくし、著述編纂にかかるもの百数十部を残す。ことに『集古十種』が有名である。歌人として、考古学者としてのかれは、ほかに『古文書類聚』などの編集にも手を染めている。となると、かれの身边には、おびただしい古書・古文書が蒐集されたにちがいない。この「白河切本後撰集」もその一つで、命名の由来がそれによるとしても、いささかも不思議ではない。この『古筆学大成』においては、その所伝に重きをおいて、「白河」の地名を採用することとした。

なるほど首肯できる説であろう。また、「江戸切」という別称についても、『古筆学大成』では、以下のように推論されている。

幕府の老中首座に出世して、江戸の藩邸に起居したかれの日夜賞翫の対象であったことを記念しての命名となれば、これもうなずくことができるであろう。

次に、「六半」とは、洋装本でいうところの1頁分が懐紙の六分の一の大きさで、方形に近く、元は升形の冊子本であったことを意味する。

「後撰哥二行書」とは、書写内容が『後撰和歌集』で和歌一首が二行書きということである。書写内容はまさにそのとおりである。しかしながら、後述するが、和歌は必ずしもすべて二行書きではなく、むしろ三行書きの箇所の方が多いのではあるまいか。

「杉原昏」とは、『古筆学大成』の解題によると、「播磨国(兵庫県)多可郡加美郷の杉原谷で漉いたので、この名がある。(中略)楮質の紙で、上質のものであった。当時、貴族社会ではこの「梶原庄紙」(杉原紙)が一般の消費用として、もっぱら使用されていたようである。」とのことである。西行系のかな古筆には、このような楮系素紙、すなわち質素な紙を用いた事例が多い。

筆者は、西行と伝わるが、ここで西行その人と西行真蹟および伝称のかな古筆を、拙著『平安かなの美』(村上翠亭氏監修、二玄社、2004年10月)より確認しておく。

西行(1118～1190)は左衛門尉佐藤康清の子、俗名を義清という。保延6年23歳の時に出家(法名は円位)して、西行と号した。西行の真蹟と確認できるものは、「一品経和歌懐紙」(京都国立博物館蔵)と「宝簡集所収円位書状」(金剛峯寺蔵)や元御物「西行書状」(現・三の丸尚蔵館蔵)等、ごく一部である。

西行系のかな古筆として、書風の上から大きく

①『一条撰政集』(藤原伊尹の家集、二種類の書風?)

『為仲集』升形本(橘為仲の家集)

『曾丹集』升形本(曾禰好忠の家集、三種類の書風?)

『出羽弁集』(出羽弁の家集、二種類の書風)等

②『中務集』(中務の家集、二種類の書風)

『山家心中集』(西行の家集の一つ、三種類の書風)

『中御門大納言殿集』(藤原宗家の家集、三種類の書風)

『三位中将公衡卿詠』(藤原公衡の家集)

『小大君集』(小大君の家集)等

③「白河切」(『後撰和歌集』)

④「小色紙」(藤原俊忠の家集)

と、以上のように4系統に分類した。

①系統は、率意的に運筆されているが、特に『一条撰政集』は書写年代の上がるもので、連綿の長短、行の流れ、一面あるいは見開きでの構成等、実に巧妙で的確である。穂先の鋭さと弾力を最大限に活かし切った名品といえよう。『為仲集』とともに、藤原定家(1162～1241)の筆で書き入れをした処もあるので、定家手沢本であり、外題も定家筆となっている。いずれも、元は冷泉家伝来のものと推定できよう。

『為仲集』『曾丹集』の升形本は、従来「為仲集切」「曾丹集切」として知られていたが、近時、それぞれ零本の存在が確認されたので、資料が一気に増加されたことになる。特に、「曾丹集切」では、一連のものとしながらも何となく書風が異なると思っていたが、『曾丹集』残欠本を通覧することにより、書風分類も可能になりつつある。

②系統は、歯切れのよい線質で、紙面を切り裂くように運筆している。藤原俊成(1114～

1204) 監督下に、俊成側近の者によって書かれたのであろう。『中務集』『山家心中集』も、元は冷泉家伝来のものであろうか。

③は、側筆を多用し、動きと呼吸が大きい。処によっては、破筆なども構わずに筆先を駆使している。

④は、①～③の各特徴的な箇所を、あたかも小さな紙面に凝縮したかのようなようである。

これらの料紙はほとんどが楮紙質で、浄書本ではあるまい。「白河切」を除き、私家集を書写内容とするのも特徴である。『一条摂政集』を除き、本文の書写年代は、そのほとんどが12世紀後半頃であり、これらの本は、俊成監督下に側近の者によって書写された、私家集手控本の一大集成ではないかとも推察した。

また、①②でわかるように、一冊の本の中で何人かの筆跡に分けられる点に注目し、今後は厳密な書風分類を試みるべきであろう。

ともあれ、「白河切」は、西行の真蹟である「一品経和歌懐紙」などと書跡を比較しても異筆である。書写年代であるが、『古筆学大成』では、「平安時代末期、十二世紀末、すなわち伝称筆者にひとしいころのものとする。」としているが、先述のように、稿者もこれに賛同したい。

2. 『平安かなの美』所収「白河切」

国文学研究資料館のホームページ (<http://www.nijl.ac.jp/>) には、「日本文学及びその関連領域研究のため、当館では様々なデータベースを作成し公開しています。」というコンセプトのもと、電子資料館が公開されている。それには32件ものデータベースがあり、「19 古筆切所収情報データベース」(<http://base1.nijl.ac.jp/~kohitu/>) もその一つである。

「古筆切所収情報データベース」の凡例・注記を抜粋すれば、以下のようになっている。

このデータベースは、伊井春樹氏・高田信敬氏編『古筆切提要』(1984年 淡交社) 以後に影印刊行された古筆切類の所収情報の検索システムです。

伝称筆者／作品・形態／切名／極札等(現在入力中のため一部のみ)／所収書目名、の各項目から検索できます。

データはこちらの書目の図版・解説に基づき作成・抄録しました。うち特に作品名に関しては、基本的に各書目における認定を抄録してあります。最近の研究成果を踏まえ、あるいは私見により一部改めたものもありますが、まだ極めて不十分ですのでご了承下さい。なおデータは今後も増補・訂正していきます。

→ 2008年8月、書目56点を追加しました。いずれこちらの書目も追加予定です。

(<http://base1.nijl.ac.jp/~kohitu/> 9)

この情報によると、当初の書目は、以下のとおりである。

「影印(古筆)」として、小松茂美編『日本書蹟大鑑』全25巻(1978年5月～1980年6月 講談社)から国立歴史民俗博物館館蔵史料編集会編『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書 第20巻 古筆』(2001年1月 臨川書店)まで、都合24点である。この中では、特に、小松茂美氏著『古筆学大成』が重要であるので、その凡例を見ておく。

・小松茂美氏『古筆学大成』全30巻(1989年1月～1993年11月 講談社)

※第30巻補遺は図版1点ずつデータ化、それ以外は目次のみデータ化。

ちなみに、稿者の関わった以下の2点も採用されている。

・小林強氏・高城弘一氏『古筆切研究』1(2000年4月 思文閣出版)

・村上翠亭氏・高城弘一氏・松村一徳氏・小林強氏・中村健太郎氏『古筆鑑定必携 古筆鑑定と極札』(2004年3月 淡交社)

「図録・解題(古筆)」として、『昭和四十三年秋 古筆と蓋置展』(1968年9月 藤田美術館)から『悠久のロマンを抱く 名家の手紙 陽明文庫所蔵名品による』(2007年5月 社団法人日本書芸院・読売新聞社)まで、都合43点である。

また、「雑誌(古筆)」として1点、「論文(古筆)」として6点、「影印(短冊)」として3点、「図録・解題(短冊)」として4点、「論文(短冊)」として1点が挙げられている。

以下は、追加書目である。

「影印(古筆)」として、小松茂美編『日本書蹟大鑑』全25巻(1978年5月～1980年6月 講談社)をはじめ、国立歴史民俗博物館館蔵史料編集会編『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書 第20巻 古筆』(2001年1月 臨川書店)まで、都合5件。

「図録・解題(古筆)」として、『昭和四十三年秋 古筆と蓋置展』(1968年9月 藤田美術館)から『悠久のロマンを抱く 名家の手紙 陽明文庫所蔵名品による』(2007年5月 社団法人日本書芸院・読売新聞社)まで37件。

「雑誌(古筆)」として1件、「論文(古筆)」として5件、「影印(短冊)」として3件、「図録・解題(短冊)」として4件、「論文(短冊)」として1件。

以下は、いずれ追加予定となっている書目である。

「図録・解題(古筆)」として、毎日新聞社至宝委員会事務局編『皇室の至宝 東山御文庫御物』5(2000年9月 毎日新聞社)、『ふくやま書道美術館所蔵品図録Ⅵ 古筆手鑑』(2007年3月 同館)、『泉屋博古 日本書跡』(2007年10月 泉屋博古館)、『西行の仮名』(2008年2月 出光美術館)の4点、「論文(古筆)」として、別府節子「出光美術館蔵 手鑑『浜千鳥』」(『出光美術館 館報』142 2008年2月)の1点、「影印(短冊)」として、佐々木勇蔵『短冊手鑑 心のふるさと』(1966年2月 同刊行会)の1点の都合6点が挙げられている。

「古筆切所収情報データベース」において、「白河切」で検索したところ、以下の17件がヒットした。

- 1 古筆手鑑大成 第6巻 あけぼの(上) 梅沢記念館蔵 // 70 // 西行 // 後撰集 396-399 // 白河切
- 2 古筆手鑑大成 第8巻 谷水帖 逸翁美術館蔵 // 22 // 西行 // 後撰集 492・?・493-495 // 白河切
- 3 古筆手鑑大成 第14巻 手鑑 京都・観音寺蔵 // 64 // 西行 // 後撰集 245 // 白河切
- 4 過眼墨宝撰集 3 // 8 // 西行 // 後撰集 454-455 // 白河切

- 5 古筆学大成 第6巻 後撰和歌集1 // 7 // 西行 // 後撰集 // 白河切本
後撰和歌集
- 6 古筆学大成 第30巻 補遺 // 31 // 西行 // 後撰集 // 白河切本後撰集
- 7 古筆切影印解説Ⅱ 六勅撰集編 // 色刷-1 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 8 古筆展 平安和様書之美(BSN新潟美術館) // 22 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 9 逸翁美術館蔵国文学関係資料解題 // 23 // 西行 // 後撰集 // 白河切 / 江戸切
- 10 出光美術館蔵品図録 書 // 1-197 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 11 大阪青山短期大学所蔵品図録 第1輯 // 81 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 12 三代集の古筆(春日井市道風記念館) // 25 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 13 やまとうた一千年(五島美術館) // 88 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 14 やまとうた一千年(五島美術館) // 89 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 15 やまとうた一千年(五島美術館) // 90 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 16 やまとうた一千年(五島美術館) // 91 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- 17 平安の仮名 鎌倉の仮名(出光美術館) // 89-15 // 西行 // 後撰集 // 白河切
- また、「白川切」で検索したところ、以下の1件がヒットした。

- 1 古筆と蓋置展(藤田美術館) // 7 // 西行 // 後撰集 // 白川切

このように、数多く紹介されているが、『古筆学大成』第6巻(後撰和歌集1)で、大方収録されており、重複して掲載されているものも少なくない。『古筆学大成』の解題によると、総数100葉(『古筆学大成』第30巻(補遺)の一葉を加えると、都合101葉)の確認となっている。

拙著『平安かなの美』は、書風の系統ごとにわけ、影印を中心として、解題や適宜論考を加えたものである。また、新出の古筆も何点か紹介しているが、「古筆切所収情報データベース」に採られることはなかった。その新出のかな古筆の一つが「白河切」である【図1参照】。

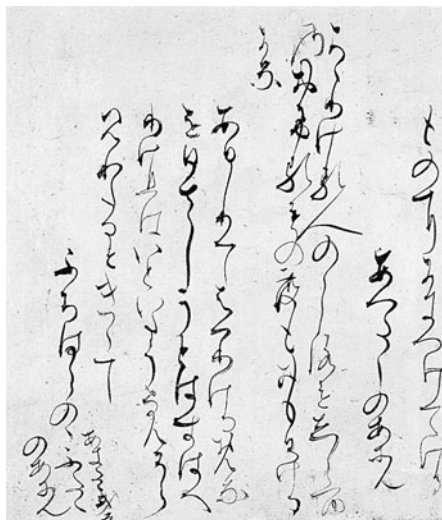


図 1

『平安かなの美』123頁に影印が掲載されているが、これは個人蔵の手鑑『翰墨城』所収の新出「白河切」である。『古筆学大成』はもとより、現段階において、『平安かなの美』以外では紹介されていない。鑑定者未詳極札では、「西行法師」となっており、本紙の寸法は、タテ17.2cm×ヨコ14.6cm。この一葉の釈文は以下のとおりである。

ものにかきつけてける
あつたゝのあそむ
かゝりける人のこゝろをしらつゆ
のおけるものともおもひける
かな
あひしりてはべりけるおむな
をひさしうとはすはへ
りければいといたうなむうら
みわたるときゝて
あきたゝ或本
ふちはらのゝふたゝ
のあそむ

『後撰和歌集』卷十(恋二)613の詞書「わさとにはあらて時時物いひふれ侍りける女の、心にもあらて人にさそはれてまかりにければ、とのみ物にかきつけてつかはしける」の後半部分からはじまり、614の詠者名までである。この後には、「鶯の雲井にわひてなくこゑを春のさかとそ我はききつる」の歌がくることと思われる。

この一葉では、和歌一首を三行書きとする。これは、先述の『新撰古筆名葉集』所載「白川切」の「二行書」というのには反する。『古筆学大成』の影印を確認すると、実はほとんどが三行書きであり、二行書きはほんのわずかである。後述の新出「白河切」も歌は三首あるが、三首ともすべて三行書きとなっているのではあるまいか。

一面の行数であるが、『古筆学大成』の影印を確認すると、全面に書かれていて、おおかた十行か十一行である。行間をつめて十二行のものやそれ以上の行数のものも見受けられる。

墨継ぎした一筆目の横画は、筆を手前に倒したかのように側筆で運筆している。したがって、かなり線に肥瘦がみられる。筆が割れていようが、構わずに運筆している箇所も随所に散見する。

3行5字目「る(類)」と4行4字目「る(類)」とが隣どうして、違和感があるが、まったく頓着していない。同様に、3行7字目「の」と4行6字目「の」とがやはり隣どうしになっているよう。

3. 新出手鑑所収「白河切」

近時、未発表の手鑑を落手する機会を得た。この手鑑には、表裏数十葉の古筆切を所収するが、すべて極札を有しない。鎌倉時代の書写にかかる古筆切も数葉あるが、この中でも、白眉が「白

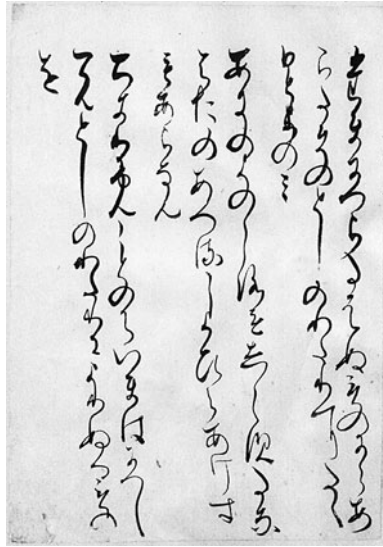


図 2

河切」である【図2参照】。本紙の寸法は、タテ 17.5cm × ヨコ 12.3cm。この一葉の釈文は以下のとおりである。

たまかつらたえぬものからあ
 らたまのとしのわたりにたゝ
 ひとよのみ
 あきのよのこゝろもしらすたな
 はたのあへるこよひはあけす
 もあらなむ
 ちきりけむことのはいまはかへし
 てむとしのわたりによりぬるもの
 を

『後撰和歌集』巻五（秋上）の 234 歌から 236 歌のまでの都合 3 首である。先述のとおり、他の事例から推して、また紙幅からみても、前後にあと数行存在していたと思われる。直前の 233 歌「あまの河流れてこひはうくもそあるあはれと思ふせにはやく見む」はもとは三行書きで、この面には後半の二行があったのであろうか。この二行ではじまるのは中途半端ということで、体裁を整えるために断ち落としたものと推測する。

図 1 同様、墨継ぎした一筆目の横画は、筆を手前に倒したかのように側筆で運筆している。しかしながら、図 1 よりは線の肥瘦の差が見られず、全体的にやや線に膨らみが見られよう。

この三首に「の」が 8 回も重出するが、すべてひらがなの「の」を使用し、隣の行と重なってようが、関係なく運筆しているのは、図 1 同様であるまいか。また、6 行 5 字目「む(无)」と

7行5字目「む(无)」とが隣どうしで、やはり違和感は否めない。

三首目の三行目は、たった1字ではあるが、行をとって堂々と書写しているのにも、不思議さを覚えずにはいられない。

おわりに

本稿では、改めて伝西行筆「白河切」を確認するとともに、新出の「白河切」2葉について、その特異な書写形態について考察を行った。

線には肥瘦が見られ、緩急自在に運筆している。また、隣どうしで同じかなを配しようが、まったく頓着せずに書き進めている感があることも判明した。

また、『新撰古筆名葉集』所載「白川(河)切」の「二行書」というのには反し、ほとんどが三行書きであることを確認した。新出の一葉では、その三行目にわずか一字であるものの、行を確保し、書写していることも明白となった。

今後の課題として、他の「白河切」とも見比べ、今回の特異な書写形態がどの程度普遍的なものなのかを考察したい。また、使用字母の問題等についても検討したいと思う。